

## 大学の探究学習支援プログラムの事例

大学	崇城大学	桜美林大学	産業能率大学	上智大学	宮城大学	札幌大学
熊本市、菊池郡 / 学生数：3,625人 / 学部：工、芸術、情報、生物生命、薬	東京都町田市、新宿区、多摩市、神奈川県相模原市 / 学生数：10,124人 / 学群：リベラルアーツ、ビジネスマネジメント、グローバル・コミュニケーション、健康福祉、航空・マネジメント、芸術文化、教育探究科	東京都世田谷区、神奈川県伊勢原市 / 学生数：3,956人 / 学部：経営、情報マネジメント	東京都千代田区、新宿区 / 学生数：12,080人 / 学部：神、文、総合人間科学、法、経済、外国語、国際教養、総合グローバル、理工	宮城県黒川郡、仙台市 / 学生数：1,812人 / 学群：看護、事業構想、食産業	札幌市 / 学生数：3,091人 / 学群：地域共創	
①社会が求める科学技術人材について高校と共有し、理数系ハイレベル人材の育成に寄与する。②大学のリソースを活用し、探究の質の向上を図る。③高校から大学への一貫した人材育成プロセスを構築し、成長を可視化。将来のサイエンス、イノベーションを牽引する人材育成プロセスを開発する。	志願者の質向上をめざし、探究の切り口から本学の学びへのレディネス形成と学びの意欲を高めるべく、高校と大学の接続を強化。	高校生が「どのように社会や世界と関わり、よりよい人生を送るか」を考える場として、Well-Beingを基盤に据えた探究学習の展開促進のため、高校での探究と大学のPBLを接続し、生徒がエージェンシー*2を発揮するための支援を行う。	高校生のうちに探究するおもしろさに出会い、主体的に自分の学びを組み立てる力を伸ばすことにより、大学進学後に大学の環境を使いこなし、4年間の学びを最大化することへとつなげる。	地域に根差した公立大学として、高校との教育上の連携を固く相互の教育の質を高めていくため。また、緊密な高大連携こそが18歳人口の減少という逆風に立ち向かうための鍵になるため、探究学習支援などを通じて高校と組織的、継続的な関係構築を図る。	探究学習の経験が、アクティブラーニングを重視したプログラムを多数展開する本学での学びに結びつくと考え、大学のリソースを生かした「成果発表」の場の創出に取り組む。探究学習の指導に試行錯誤している高校教員と、直接的なコミュニケーションを深めることも狙いの一つ。	
<p>▶ <b>高校生向けコンテスト</b>：「サイエンスインターハイ@SOJO」「つまようじタワー耐震コンテスト」(工学部建築学科主催)、「ビジネスプランコンテスト」など、高校生向けの各種コンテストを開催し、高校生の研究活動を支援。</p> <p>▶ <b>熊本サイエンスコンソーシアム(KSC)</b>：県内SSH指定校5校および理数系コースのある3校によって構成)と連携協定を締結し、理系人材育成に向け、生徒の課題研究や探究活動を大学教員が支援。</p> <p>▶ <b>研究支援のカテゴリー(テーマ)</b>を学科ごとに提示：(例)ナノサイエンス学科：有機化学、有機合成、色素、香料、海洋プラスチックなど。</p>	<p>▶ <b>高1・2年生向け「ディスカバ！」</b>：高校では学べない、未来をワクワクさせる体験型キャリア支援プログラム。本格的な探究に取り組む前の探究の練習講座。「ディスニー研究会」「新しい幸せをつくる結婚式とは?」「次に流行る○○を予測しよう」など高校生の関心が高いテーマを中心に50講座提供。学内またはオンラインで教員から出された課題にグループで探究し「ディスカバ! アワード」等で成果発表、フィードバック。</p> <p>▶ <b>高3向け「総合・推薦型入試準備セミナー」</b>等：探究の成果を振り返り言語化するためのプログラム。</p> <p>▶ <b>高校向け「ディスカバ! for School」</b>：高校への出張プログラム。近県は訪問、遠方はオンラインで実施。</p>	<p>▶ <b>「主体的学習者育成プログラム・協働的学習者育成プログラム」</b>：探究に欠かせない「自ら問いを立てる力」「協働する力」を養成するプログラムを高校に提供。家族の食卓風景や人口流出の多い町を事例に、課題発見力や解決力、情報収集力や合意形成について学ぶ。</p> <p>▶ <b>「探究学習ガイド&amp;ワークシート」</b>：大学がこれまで取り組んできたPBLの知見を生かして開発。探究学習の過程を18ステップに分け、ガイドとワークシートに沿って学習や調査を進められるようにしている。</p> <p>▶ 探究学習推進に向けた全校対象とした講演、個別研修会、コンサルテーションも実施。</p>	<p>▶ <b>「せかい探究部」</b>：10か月をかけて実施する高校生対象のオンライン探究学習プログラム。月2回のグループレクチャー(国際社会の情勢解説や、探究のスキル修得支援)と月1回の個別ゼミ(1対1の面談形式による論文指導)を通して、各自が東南アジアをはじめ世界のフィールドからテーマを決め、論文を書き上げるまでを大学教員や研究者が支援。その他、ゲスト講師による特別セッションや海外の専門家や関係者へのオンライン調査もサポート。受講料9万円(初月は無料体験でその後正式エントリー)。</p>	<p>▶ <b>「総合的な探究の時間」の支援</b>：教員が高校の授業に参加して指導の要所を担う。テーマ設定や調査・実験等の進め方について助言したり、まとめの発表に講評を加えたりする。要望に応えてその高校出身の学生を授業に参加させることも多く、高校での学びが大学でどういかされているかという、等身大の話が生徒に刺激を与える。</p> <p>▶ <b>高校教員向け研修</b>：「テーマ設定」「仮説の立て方」「調査手法」「分析手法」「プレゼンテーションの方法」など、各プロセスで想定される指導上の課題解決に寄り添い、指導力向上を支援。</p> <p>▶ その他、高校生が大学の講義、ゼミ、演習に参加する「アカデミック・インターンシップ」も開催するほか、出前講義・大学見学の実施や、パンフレット等も公開。</p>	<p>▶ <b>高校生の探究学習発表会「HOKKAIDOハイスクールQUEST」</b>：高校生が日々取り組んでいる探究学習の成果を社会にアピールし、学びを深める機会を創出する。全体プレゼンテーションとポスターセッションという2つのセッションを実施。高校生の発表に対して「優劣を決める、点数をつける」のではなく「フィードバックを行う」という趣旨で、2022年10月に実施。</p> <p>▶ <b>高校教員向けセミナー</b>：発表会に参加した高校教員をパネラーに迎えて、実際の指導方法などの話を聞く。現場の教員が、職場に持ち帰って役に立つ、エールを送る内容のプログラムを実施。探究学習の指導に意欲的な教員の背中を押し、探究学習の推進に希望を込める内容。</p>	
<p>▶ <b>高大接続ワーキンググループ</b>：探究活動支援をはじめ、高大接続事業に関する活動の企画と運営を行う。</p> <p>▶ <b>地域共創センター</b>：高校が継続的な研究支援を依頼する際の窓口。熊本サイエンスコンソーシアム(KSC)との連携協定にもとづく研究支援の窓口。</p> <p>▶ <b>入試課</b>：出張講義をはじめ各種支援等、高校からの相談窓口。探究活動支援にひも付く入試の企画・実施。</p>	<p>▶ 入学部が主管(運営は教育コーディネーター企業に業務委託)。グループワークは教職員がファシリテーターを務めるほか、メンターとして教育に興味を持つ学生(他大学も含む)も参加。学生はディスカバ!を修了し、メンター研修受講が条件。プログラムは自学の教員だけでなく、学生団体や企業、他大学とも協働して作成。</p>	<p>▶ 高校との連携窓口は、入試企画部企画課(高大連携推進担当)。</p> <p>▶ 高校からのニーズ、探究学習の状況を高大連携推進担当がヒアリングし、最適な方法、手段についてアドバイスし、必要に応じて大学教員をコーディネートする。また、高校側のニーズによっては、外部有識者を紹介する。</p>	<p>▶ 学校法人上智学院傘下の海外教育事業会社「Sophia Global Education and Discovery Co., Ltd.(Sophia GED)」(バンコク)が運営。高校での探究授業経験豊富な同社の教育プログラムディレクター(上智大学特任助教兼任)が中心となって設計・運営し、講師も務める。</p>	<p>▶ アドミッションセンターに設置した高大連携推進室。室長は教員、専任スタッフは教員6人、職員2人。高校からの依頼や相談を受け付け、担当教員の選定、内容の調整など、コーディネーターの役割を担う。高大連携の窓口を一本化することで、高校情報や連携のノウハウを全学で共有している。</p>	<p>▶ 発案者の広報渉外課長と入試課係長を中心に、入試・広報主導で実施。タスクフォースを組んでチームで運営した。高校訪問を行う教職員にも高校への広報の協力依頼をした。</p> <p>▶ 発表会開催時には、高校生にフィードバックを行うために大学教員だけでなく、自学の卒業生を含む学外ゲストに参加を依頼。高校生に対して有意義なアドバイスを与えた。</p>	
<p>▶ 主催するコンテスト等の参加者数(2022年度)「サイエンスインターハイ@SOJO」(21校、478人)「つまようじタワー耐震コンテスト」(25校、148人)「ビジネスプランコンテスト」(4校、20チーム)</p> <p>▶ 継続的な探究活動支援を行った高校生は9校73人(2021年度~)</p>	<p>▶ 2019年より実施。2020年度実績は、高校生は延べ2万人、高校は約50校が参加。コロナ禍を機にオンラインでも実施したところ、従来接点のなかった高校の生徒や高校の参加が増加している。</p>	<p>▶ 主体的・協働的学習者育成プログラムは、全国40校以上の高校で実施、受講した高校生は約1万人程度。</p> <p>▶ 探究学習に関するガイド等提供含めた講演およびコンサルテーションは、全国20校程度の高校で実施。</p>	<p>▶ 2020年度の試行プログラムは18人。21年度は51人。22年度は正式エントリーした75人を抽選で50人に絞った。多くが2年生だが、1年生や受験と並行して参加する3年生もいる。高校への広報活動は行わず、Sophia GEDのウェブサイト等を通じて高校生に直に発信、募集。</p>	<p>▶ 高校から、出前講義35件、大学見学36件、「総合的な探究(学習)の時間」の支援47件の依頼を受け、それぞれに対応。また、大学での学びを体験する「アカデミック・インターンシップ」には37校251人の高校生が参加。</p>	<p>▶ 「HOKKAIDOハイスクールQUEST」には4校9チームが参加。道内の高校のみならず、2022年度に包括連携協定を締結したばかりの神田女学園中学校高等学校からも3人が参加。</p>	
<p>▶ <b>「探究活動プログレス選抜(専願)」</b>：高校時代に崇城大学の教員に研究支援を受けた高校生が対象。1年次から希望する研究室に配属され、研究を継続できる。特待生制度「ミライクSTEAM」の対象入試。</p> <p>▶ <b>「探究活動アピール選抜(併願可)」</b>：高校時代に探究活動や課題研究に取り組んだ経験がある高校生が対象。各種団体や高校で開催されたコンテスト、研究発表会をはじめ、崇城大学が主催するコンテストで発表した研究論文などの成果物をエントリーに活用可能。</p>	<p>▶ <b>「探究入試Spiral」</b>：総合型選抜。併願可。評価基準は公開。「プレゼンテーション型」(探究の経験をプレゼンする)、「ディスカバ! 育成型」(「ディスカバ!」の対象プログラムで優秀な成果を残し「Spiral認定証」を受け取った者対象)、「外部アワード活用型」(大学が定めるアワードやコンテストにおいて優秀な成果を残した者対象)の3方式がある。プレゼンテーション型は高校までの探究学習について学校内外で発表した経験が出願条件。</p>	<p>▶ <b>「MI*3方式」</b>：経営学部マーケティング学科の入試に新設。「高校時代に取り組んだ探究学習や課題研究のテーマとその理由、学んだこと」を書く自己記述書、探究学習で培われた課題発見、解決力や論理構成力を社会課題に関するレポートとプレゼンテーションで評価する。</p> <p>▶ <b>「未来構想方式」</b>：知識や経験を「活用・応用する思考力」を評価する一般選抜。MI方式同様探究学習で培った能力やスキルを小論文形式のレポートで評価。スマホ持ち込み可。</p>	<p>▶ 連携する入試制度は設けていないが、これまで10人のプログラム修了生が入学。2023年度も複数が入学見込み。</p> <p>▶ 2022年度秋学期には、せかい探究部の受講生が参加する上智大学の授業科目「探究的な学びを創る」を開講し、高校生と大学生が共に学ぶ機会が設けられた。一般の学生に加え、せかい探究部を修了し上智大学に入学した学生も参加した。</p>	<p>▶ <b>「総合型選抜」</b>：探究学習の成果を評価。募集人員は6つの学類で各8人(全体の11%にあたる48人)。1次選考では、講義を聞いてレポートを作成。その成績と提出書類を総合的に評価する。2次選考は2日間かけ、初日は前回の講義と関連したテーマで2回目の講義を実施、グループディスカッションと振り返りレポートを課す。これらの成績と2日目の面接(口頭試問を含む)、提出書類の総合評価で合否判定。</p>		

探究学習の充実のために、大学はどのような支援ができるのか。先んじて探究支援に取り組む大学の取り組みを例に考えていく。

入試までつなげる探究支援の一つのモデルになるのが、桜美林大学の「ディスカバ!」だ。ディズニーなど、高校生の興味・関心を引くプログラムを多数提供し、本格的な探究の前にプロセスを体験できる。高3向けのアウトプットプログラムや、探究の経験をアピールできる入試も用意し、自学の学びへのレディネス形成まで、一貫した流れをつくっている。

理系学部が多い崇城大学では、熊本県内の\*1SSH指定校が参加するコンソーシアムと連携協定を結び、高校生の課題研究や探究学習を支援。大学でも研究を継続したい生徒を対象とした入試も、新たに始めた。

上智大学は高校生向けに、バンコクに拠点を持つ関連会社がオンライン探究プログラム「せかい探究部」を提供。個別ゼミやオンライン現地調査のほか、大学とのコラボ授業も展開する。有料だが、申し込みは年々増加。連携する入試はないが、これまで10人以上の修了生が入学している。

成果発表の場をつくるという支援の方法もある。札幌大学の「HOKKAIDOハイスクールQUEST」は、道内の高校に加え、首都圏の私立校も参加して成果を発表。生徒の発表に対して優劣をつける評価ではなく、今後の活動に役立つフィードバックを重視している点が特徴的だ。

高校教員の指導力強化も大学ならではの支援領域だ。産業能率大学は自学のPBLの知見を基にした「探究学習ガイド&ワークシート」やプログラムを高校に提供するほか、研修会やコンサルテーションも行ってきている。札幌大学は、探究成果発表イベントに参加した高校教員をパネラーにしたセミナーを実施している。

宮城大学は地域の高校との組織的な連携を図り、「総合的な探究の時間」の支援や高校教員向けの研修を積極的に実施。教職員8人からなる高大連携推進室が、受け付けから教員の選定、内容調整までワンストップで対応している。

探究学習支援は、大学にとっても得るものは多い一方で、支援に携わる大学教員の負担は少なくない。P.34の東京都市大の事例は、負担軽減に取り組む、教職協働で行う好事例と言えよう。

探究学習の充実のために、大学はどのような支援ができるのか。先んじて探究支援に取り組む大学の取り組みを例に考えていく。

入試までつなげる探究支援の一つのモデルになるのが、桜美林大学の「ディスカバ!」だ。ディズニーなど、高校生の興味・関心を引くプログラムを多数提供し、本格的な探究の前にプロセスを体験できる。高3向けのアウトプットプログラムや、探究の経験をアピールできる入試も用意し、自学の学びへのレディネス形成まで、一貫した流れをつくっている。

理系学部が多い崇城大学では、熊本県内の\*1SSH指定校が参加するコンソーシアムと連携協定を結び、高校生の課題研究や探究学習を支援。大学でも研究を継続したい生徒を対象とした入試も、新たに始めた。

上智大学は高校生向けに、バンコクに拠点を持つ関連会社がオンライン探究プログラム「せかい探究部」を提供。個別ゼミやオンライン現地調査のほか、大学とのコラボ授業も展開する。有料だが、申し込みは年々増加。連携する入試はないが、これまで10人以上の修了生が入学している。

成果発表の場をつくるという支援の方法もある。札幌大学の「HOKKAIDOハイスクールQUEST」は、道内の高校に加え、首都圏の私立校も参加して成果を発表。生徒の発表に対して優劣をつける評価ではなく、今後の活動に役立つフィードバックを重視している点が特徴的だ。

高校教員の指導力強化も大学ならではの支援領域だ。産業能率大学は自学のPBLの知見を基にした「探究学習ガイド&ワークシート」やプログラムを高校に提供するほか、研修会やコンサルテーションも行ってきている。札幌大学は、探究成果発表イベントに参加した高校教員をパネラーにしたセミナーを実施している。

宮城大学は地域の高校との組織的な連携を図り、「総合的な探究の時間」の支援や高校教員向けの研修を積極的に実施。教職員8人からなる高大連携推進室が、受け付けから教員の選定、内容調整までワンストップで対応している。

探究学習支援は、大学にとっても得るものは多い一方で、支援に携わる大学教員の負担は少なくない。P.34の東京都市大の事例は、負担軽減に取り組む、教職協働で行う好事例と言えよう。

探究学習の充実のために、大学はどのような支援ができるのか。先んじて探究支援に取り組む大学の取り組みを例に考えていく。

入試までつなげる探究支援の一つのモデルになるのが、桜美林大学の「ディスカバ!」だ。ディズニーなど、高校生の興味・関心を引くプログラムを多数提供し、本格的な探究の前にプロセスを体験できる。高3向けのアウトプットプログラムや、探究の経験をアピールできる入試も用意し、自学の学びへのレディネス形成まで、一貫した流れをつくっている。

理系学部が多い崇城大学では、熊本県内の\*1SSH指定校が参加するコンソーシアムと連携協定を結び、高校生の課題研究や探究学習を支援。大学でも研究を継続したい生徒を対象とした入試も、新たに始めた。

上智大学は高校生向けに、バンコクに拠点を持つ関連会社がオンライン探究プログラム「せかい探究部」を提供。個別ゼミやオンライン現地調査のほか、大学とのコラボ授業も展開する。有料だが、申し込みは年々増加。連携する入試はないが、これまで10人以上の修了生が入学している。

成果発表の場をつくるという支援の方法もある。札幌大学の「HOKKAIDOハイスクールQUEST」は、道内の高校に加え、首都圏の私立校も参加して成果を発表。生徒の発表に対して優劣をつける評価ではなく、今後の活動に役立つフィードバックを重視している点が特徴的だ。

高校教員の指導力強化も大学ならではの支援領域だ。産業能率大学は自学のPBLの知見を基にした「探究学習ガイド&ワークシート」やプログラムを高校に提供するほか、研修会やコンサルテーションも行ってきている。札幌大学は、探究成果発表イベントに参加した高校教員をパネラーにしたセミナーを実施している。

宮城大学は地域の高校との組織的な連携を図り、「総合的な探究の時間」の支援や高校教員向けの研修を積極的に実施。教職員8人からなる高大連携推進室が、受け付けから教員の選定、内容調整までワンストップで対応している。

探究学習支援は、大学にとっても得るものは多い一方で、支援に携わる大学教員の負担は少なくない。P.34の東京都市大の事例は、負担軽減に取り組む、教職協働で行う好事例と言えよう。

探究学習の充実のために、大学はどのような支援ができるのか。先んじて探究支援に取り組む大学の取り組みを例に考えていく。

入試までつなげる探究支援の一つのモデルになるのが、桜美林大学の「ディスカバ!」だ。ディズニーなど、高校生の興味・関心を引くプログラムを多数提供し、本格的な探究の前にプロセスを体験できる。高3向けのアウトプットプログラムや、探究の経験をアピールできる入試も用意し、自学の学びへのレディネス形成まで、一貫した流れをつくっている。

理系学部が多い崇城大学では、熊本県内の\*1SSH指定校が参加するコンソーシアムと連携協定を結び、高校生の課題研究や探究学習を支援。大学でも研究を継続したい生徒を対象とした入試も、新たに始めた。

上智大学は高校生向けに、バンコクに拠点を持つ関連会社がオンライン探究プログラム「せかい探究部」を提供。個別ゼミやオンライン現地調査のほか、大学とのコラボ授業も展開する。有料だが、申し込みは年々増加。連携する入試はないが、これまで10人以上の修了生が入学している。

成果発表の場をつくるという支援の方法もある。札幌大学の「HOKKAIDOハイスクールQUEST」は、道内の高校に加え、首都圏の私立校も参加して成果を発表。生徒の発表に対して優劣をつける評価ではなく、今後の活動に役立つフィードバックを重視している点が特徴的だ。

高校教員の指導力強化も大学ならではの支援領域だ。産業能率大学は自学のPBLの知見を基にした「探究学習ガイド&ワークシート」やプログラムを高校に提供するほか、研修会やコンサルテーションも行ってきている。札幌大学は、探究成果発表イベントに参加した高校教員をパネラーにしたセミナーを実施している。

宮城大学は地域の高校との組織的な連携を図り、「総合的な探究の時間」の支援や高校教員向けの研修を積極的に実施。教職員8人からなる高大連携推進室が、受け付けから教員の選定、内容調整までワンストップで対応している。

探究学習支援は、大学にとっても得るものは多い一方で、支援に携わる大学教員の負担は少なくない。P.34の東京都市大の事例は、負担軽減に取り組む、教職協働で行う好事例と言えよう。

\*2 社会に参画しながら「変革を起こすための目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力」。OECDが「ラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030」の中で提唱  
\*3 マーケティング・インシアティブ

\*1 スーパーサイエンスハイスクール。文部科学省が指定した、先進的な理数教育を実施する高等学校等。学習指導要領によらないカリキュラムの開発・実践や課題研究の推進、観察・実験等を通じて体験的・問題解決的な学習等に取り組む。